



W4 - RESUMOS EM JAPONÊS - ABSTRACTS IN JAPANESE

論文 T1 - T10

T1 - マジック：大勢が目撃するびっくり現象

初めに：マジック現象は人類の歴史の中で常に存在していた。そういった現象は、内的心理過程に直面するためのヒトの適応メカニズムとして働いてきたが、その現象が自然現象と対立するのか、それとも対応するのかどうか、よくわかっていない。この論文で定義・仮定する「マジック」という語は幅広い意味をもっており、ときどき厳密ではない。狙いは、映画、書籍、テレビシリーズで見られるような大衆文化に反映された、この種の体験についての非専門家の見解の収集であった。クリップナー（2007）が広範な超心理学的識見に基づいて行った調査で観察したように、これらの文化物においては、とりわけ、錯覚的、超心理学的、宗教的様相が入り混じっているように思われる。**目的：**この論文は、異なる学問で共有された共通の関心分野、特にメンタリズム（心霊的経験を模倣するイリュージョンの形式）の理論研究とそれの超心理学への関連性に力点を置いて、マジックについての異なる観点を呈示する。これらイリュージョンのやり方の記述は本論文の範囲を超える。**結論：**神経学者と進化心理学者は、ヒトの神経系は呈示された刺激の中の規則性やパターンを同定する非常に発達した能力があり、それは環境との相互作用においてヒトの発達を促したであろうと主張する。このような特徴は、そのメカニズムに起因するはずの第2の効果をもつだろう。ヒトの存在の意味の調査はその特性に（少なくとも部分的に）関係があるだろう。この種の「離脱」は「神秘的思考」と呼ばれてきた。しかし、「神秘的思考」は「科学的思考」に似ており、両者とも自然についての説明を探求し、事実間の関係を記述する。にもかかわらず、神秘的思考は見せかけの相関と因果過程における事象の連鎖とを区別することができない。もし、科学的思考と比べるなら、神秘的思考はそれほど効率的でない認知ツールということになる。全ての科学者で意見が一致するわけではない。超心理学研究者は、神秘的思考に結びついた体験（とりわけ、思考の転移、物質に働く心の力、体脱体験）に、ある程度の経験的妥当性を与えるメカニズムの存在を提唱してきた。そういった体験は、脳障害や心理メカニズムの副産物でありえた。メンタリストは、現象を自然法則で説明できないとき、見た人が超常現象だと解釈することで、見た人自身がイリュージョンを作り出すと提唱する。その後、通常、メンタリストやイリュージョニストは個人的も重要な変化をもたらす説明を行い、その説明のもっともらしさを根拠とした信念が、今までと異なる態度を生み出す。筆者によれば、すべての観点が異なった方法で貢献するが、そのいずれもマジック現象をまったく説明できない。それぞれが、それ自身のパラダイムで制限されている。

キーワード：マジック、イリュージョニスト、神秘的思考、超心理学

T2 - 意識とスピリチュアリティの総合におけるPK研究の意味の考察

概要：

1800年代の中頃に公式に始まった偶発的念力性特異体験の研究と、20世紀の30年代から発展してきた念力の実験的研究は、環境と相互作用するヒトの潜在能力の存在（それは最新の科学理論のパラダイムに挑戦する）を指摘するという興味深い結果をもたらしてきた。このような結果は、科学のみならず、ヒトの行為と世界との干渉の限界についての宗教的信念をも挑発する。このような側面の研究は、ヒトの潜在能力の存在を頭から否定する人たちの決めつけや（著者がparanomofobicと呼ぶ典型的態度）、世界の機能や限界についての宗教的信念によって、馬鹿にされることを免れない。偶発事例だろうと実験室での研究だろうと念力研究は、確かにヒトの行為と干渉についての経験的知識を改善するのに役立つ。しかし、科学的方法の限界を知ることも必要であり、念力現象の手口を解釈するか、あるいは意識とスピリチュアリティが我々の生活にどう影響するのか、その意味は何かということも忘れることはできない。

キーワード：特異心理学、特異体験、念力、意識、スピリチュアリティ

T3 - 霊媒の心理学：内的心理過程から社会心理へ

要旨：この論文は霊媒現象の科学研究の歴史を特徴付ける主要な側面を取り上げる。まず、霊媒体験の内的心理過程（霊媒の無意識過程、性格特性、あり得る精神病など）に焦点を当てた概念を通じて、この過程がどのように起こったかを示す。さらに、霊媒の社会心理的見地、すなわちこの意識経験の精神力学の理解だけでなく、社会文化的・歴史的側面にも焦点を当てる方法の模索という、極最近に見られる概念形成作業も含む。この論文は霊媒についての先駆的研究の短い概観で始まるが、特に19世紀から20世紀にかけて心靈研究協会（SPR）の著名な会員による業績に重点を置く。同時に、その研究が出現した歴史的な文脈の一般的な意味合いと、最初の見習い霊媒達の思想と仕事の文化的・社会的影響も検討する。当時の研究の多くは霊媒の精神力学や精神病理の説明という点では重要だったが、SPRの会員の大半は霊媒現象の心理学的説明よりも、死後生存仮説の証明に興味があったことが知られている。霊媒体験に関係する内的心理過程への関心という点で、彼らは研究対象の社会心理学的過程を無視した。霊媒の心理学的研究に無関心な時代が終わった後、ごく最近になって、社会学者と人類学者が霊媒現象に注意



を向け始め、霊媒体験の文化的・社会心理的側面を非常に注意深く読み込んだ上で説明を試みた。彼らが始めた研究は、精神病理、あるいは内的心理過程理論においてのみ理解されていた（それさえ霊媒体験の複雑さの前では尻すぼみになりがちだったが）霊媒現象に対する見方を大きく変えるきっかけとなった。筆者らは本分野における彼らの貢献も示し、霊媒の心理学的研究がなぜ未だにまともに取り扱われないのか、その理由を理解するには社会心理的観点が必要だと結論する。これは実際のというだけでなく、ブラジルのような発展途上国という条件に照らしめても、霊媒研究の経験的条件を妥当なものにするために方法論的に必要な事柄である。

キーワード：霊媒、内的心理過程、社会心理、霊媒の科学的研究、精神病理学

T4 - 霊媒と社会心理的主体性：超常現象信奉の心理学における探索的研究

要旨：

大衆の広範な支持があるものの、多くの研究者は超常的過程の存在は現在の科学知識では説明できないと考えている。しかし、超常的と主張される出来事に関する経験や信念の社会心理学的機能の研究は、心理学や社会科学のどんな研究者でも、ちゃんとした研究だとされている。超常現象信奉は単なる好みや抽象的な価値の表れではない。それは歴史的に地方文化の中に形成されたもので、特定の実践形態を成している。その実践は、スピリチュアルヒーリングや死者との交流のように、大衆によっておおむね受け入れられており、印象的なやり方で人々の生活・行動・主体性に影響を与える傾向がある。これまでの科学的研究で、超常現象信奉は、外向性、幻想傾向、創造性、主観的健康など数え切れない変数との関係性が示されてきた。にもかかわらず、そういった研究は必ずしも広範な社会的・歴史的な脈の影響を考慮しているわけではなく、また、生活史・価値観と信奉との関係、あるいは超常的体験に分類できない価値・意味と信奉との関係も考慮しているわけではない。上記の理由や他の理由から、本研究は社会心理学の領域で実施され、超常現象信奉の要素をもつ宗教実践を毎日行っている2人のスピリティズム霊媒の主体形成において、信奉と体験の意味・使用を調査した。この目的のために、著名なブラジル人社会心理学者の

Ciampa

(1987)

の主体理論に基づいて、生活史（生活史研究）と名づけた質的研究方法を使った。霊媒関連活動を個人的かつ集団的に熱心に信じて実践している人が調査された。被験者は、サンパウロのスピリティズムセンターの連絡可能な常連で、実験参加に興味があり、かつグループ活動することに同意した人の中から無作為に選んだ。インタビューと補足資料（自動初期とスピリット絵画）から、次の3つの仮説が導かれた：1）人生計画としての霊媒、2）主体の目覚めとオカルト実践としての霊媒、3）思想としての霊媒。これらの仮説を明確にするため、宗教経験と精神病についてのフーコーの考え（1986）に基づいて、筆者は心理動力学と社会心理の方法を併せ持つ展望を切り開いた。本研究は社会心理学の領域に、この問題の重要性を示した。

キーワード：社会心理学、主体性、超常現象信奉、霊媒、生活史研究

T5 - 超心理学における支援活動

要旨

超心理学における支援活動は、サイの特徴をもつ経験をしたことがあるが、それにどう対処していいのかわからない人たちを手助けすることを意図している。その方法は、超心理学の歴史において、いろいろな時代に提案された。最初は精神療法の場でサイの発生が報告された、第2にサイ体験の破壊的側面と情動問題との結びつきに焦点が合わされた。第3は、潜在能力の成長によってサイ体験が起こる、あるいはサイ体験が人の成長を促すとする方法である。この方法は、統合的スピリティスト大学にて筆者が1990年代から開発してきたクリチバ医療体系モデル（R・スタンフォードとH・アーウィンの理論モデルに裏付けられている）の応用である。本論文では、サイ情報処理モデルと超常的体験がらみの経験を人を手助けする計画を議論する。まず、クリチバ医療体系モデルの各構成要素とその機能の説明を行い、現在のモデルの成り立ちの説明として歴史の要約を行う。最後に、サイがからんでいると思われる人たちと共に目的を達するために利用可能な道具類を議論する。

T6 - サイとエントロピー

要旨：

この小論は、サイが距離と共に弱くなるという数学モデルを創るためのアイデアを示す。サイが弱くなるという現在の証拠に基づいて、「意識場」が空間に負のエントロピー（S）を発生させると仮定する。x, y, zをデカルト座標としたとき、 $S = f(x, y, z)$ の方程式がこの小論の研究テーマである。

キーワード：サイ、意識場、数学モデル、エントロピー

T7 - サイ：それは訓練できるか？ サイ能力開発の文献レビュー

要旨

本論文は、サイに関連する特異体験（AEs）の研究であり、超感覚的知覚（ESP）と念力（PK）と呼ばれる心や物質に対する効果や働きを扱う。本研究は次の2点を探求する。a）実験的な意味で、サイで認知したりサイを使ったりする能力を訓練でもっと伸ばすことができるか？、b）何らかの要因を制御すれば、実験室でサイ得点を有意に増



大させられるか？ここでは、サイ能力訓練（PT）の有効性と多重サイ誘導変数を用いた研究のレビューを行う。共通点や独自点を考えると、この種の研究はPTとPCVの2種にまとめられる。研究は、特に方法と統計処理に重点を置いた特定の変数を使って、サブグループにおいて評価される。この問題についての書籍や科学論文のレビューが、2007年3月から2008年2月まで行われた。128の研究がレビューされ、そのうちの87はVCPの制御の研究、41はTPの研究で、合計すると被験者9153名、845815試行であった。大部分の研究で期待された方向に有意な結果が得られたが、サイの訓練、あるいはサイ誘導変数の制御は効果的でないと結論される。一般的に、方法の細部において、他の仮説の可能性が排除できない。主な傷は次の通りであった。1. 対照群の欠如。2.

被験者・実験者共に信念の変数制御が不適當。3.

学習評価の欠如。大部分の研究は短期で、また、サイ得点との関係において、学習に関係する要素の評価がなされていない。1つの研究を例外として残りの研究は、獲得されたサイのレベルがどのくらい維持できるか確認するという継続分析がなされていない。4.サイ、および心理学上の実験者効果が、ほとんどと言っていいほど、多数の研究で無視されている。5.

ある特定の性質や状態（たとえば、催眠、瞑想、ガンツフェルト）を評価するための標準指標の欠如。6.

サイ現象、サイ現象のテスト方法、あるいはそれら全てに影響するかもしれない多数の変数、そういうものとの関係において、系統的で統合的な方法が欠如している。この問題を論じるのに加えて、サイ訓練の探索的な素案と共に、状況を改善する示唆を提示する。

キーワード：特異心理学、超感覚的知覚、特異体験、サイ訓練

T8 - 心の変容原理：

要旨

この論文の目的は、本論文の第2部に記述されているように、ガンツフェルト経験とサイ現象を、日常状態における識閥の問題として理解しようというものだ。第1部の最初と最後の分析では、意識は思考そのものを表すと考えると、人間という状態は意識と物質のみで成り立っている。両者の関係は物理的なものではなく、アクルージョンとして、思考そのもののレベルにおいて情動的であると想定される。この関係がリンクと呼ばれるのに対し、心はサイコンと呼ばれる数学的実体において構造化されると考えられる。この考えに基づけば、サイコンは物理的観点からは、標準的ではない自由波動関数と考えられるかもしれない。

キーワード：ガンツフェルト、リンク、サイコン、サイ、情報、意識、思考、心、物質

T9 - 超常的な歌うような声についての仮説

要旨

本研究で、我々は最初にサイの概念、特に装置を使ったトランスコミュニケーション（霊界通信）と超常的な声について若干の考察を検討する。我々は、超常的な声が生まれるありそうな過程（それは確率共鳴で起きるに違いない）と、周波数合成で作ったシンセサイザー声について検討する。基本周波数と抑揚を強調して、話し声と歌声の特徴の違いを求めた。我々は装置を使ったトランスコミュニケーションの産物をゆがめる物理的、心理的、超心理学的要素の特定を試みる。最後に、分析結果に基づいて、なぜメロディー豊かな超常的な声が頻繁に生じるのか理解するために、若干の原因を提案する。

キーワード：トランスコミュニケーション、超常的な声、歌声、変容の原理

T10 - 超心理学と科学哲学：科学と超心理学において概念的問題を進展させる必要性

要旨

本論文は、これまで超心理学の会合やシンポジウムで発表してきた事柄の続きである。科学として超心理学を進展させるために、あまり検証可能ではないものの使用可能なサイの概念・仮定・信念の核心に取り組む必要があることを述べる。重要なのは、サイ問題の解明と説明である。一群の理論立てられた研究伝統において、経験的問題は重要だが、科学哲学者のラリー・ローダンは主に、概念問題に注意を喚起する。サイ研究でも、ローダンの提言の利点は、たとえば、心は直接物質に影響を与えることができるという問題でも、哲学的な問題の距離を保ちつつ、かつ問題の解決と明確化に焦点を合わせた状態で、適用できる。超心理学は、心と意識の概念の問題に、ほとんど取り組んで来なかった。そして、今日でも実証主義の基礎に基づいている。ほとんどいつも超心理学者は、サイの存在を示す事実を探そうと、無計画な研究をする。我々はここで、ローダンの研究伝統という理論的方法とラカトの研究計画という経験的方法を複合させて超心理学に応用することを提案する。我々は概念の真の核心に迫るだろう。しかし、特に概念的な疑問の提起については、ローダンの提言がサイ研究により適していると考えられる。サイは孤立した現象ではなく、他の現象や状況がからんでいると考えられており、そこでは形而上学と存在論がサイを支持する。それは、他の色々なモデルと相互作用し統合された概念の核心の使用法を意味する。他のモデルとは、心理学モデル（特にトランスパーソナル研究の成果）、催眠（サイ過程の一部としての）、生物学的モデル（シェルドレイクによって持ち込まれたモデル。サイは第7の感覚であり、心と体の相互作用と生体と環境の相互作用を媒介する）、文化的モデル（広い意味でサイを受容、または拒絶する文化）、現象論的方法、特異現象の技術的方



法（サイ現象を誘発する方法）、神経生理学的方法（ヒトの脳には爬虫類と哺乳類の側面とあるが、それがサイ体験とどうやって結びついているか）などである。

キーワード：科学哲学、超心理学、研究伝統、研究計画、形而上学、存在論、発見的教授法

T11 - 超心理体験と離人症：あるアメリカ人集団の調査

要旨

序論：超心理体験と解離との関係を調べた質問紙調査はなされているが、離人症体験も対象に含めた研究はほとんどない。**目的：**我々は超心理体験と離人症体験の間に関係があるかどうか確かめる調査を行った。**被験者：**ヴァージニア州シャーロットビルの住民258人。62.5%が女性で37.5%が男性、平均年齢49.29歳。**方法：**異なる郵便番号の住民割合に従って被験者を選択した。被験者は郵送で質問紙を受け取った。**質問紙：**質問項目は、人口統計学変数、超心理体験（覚醒時・睡眠時ESP、幽霊目撃、体脱体験、オーラ）、夢（不安な夢、明晰夢、夢の繰り返し頻度）、およびケンブリッジ離人症尺度（CDS）であった。**結果：**超心理体験があるという被験者はCDS得点が高かったが、離人症の経験はなかった。各被験者の体験数で作った超心理体験指数は、CDSと有意に正相関した。**討論：**超心理体験と離人症体験の間に有意な正相関が見られた。これは必ずしも病気を意味しない。精神病でなくても、離人症体験をもつ人がいる。

キーワード：超心理体験、離人症体験、明晰夢、調査、解離、偶発的体験

招待講演者 P1 - P2

P1 - ブラジル人スピリティズム霊媒における没入と解離

要旨

ブラジルのスピリティズム宗教は、儀式の中心的な特徴としての精神霊媒とともに、手の込んだ歴史的・文化的軌道に沿って発展してきた。この研究では、ブラジル人スピリティズム実践家2名と年齢の同じ対照被験者1名について、解離体験尺度（DES）による解離の心理測定と、Tellegen没入尺度（TAS）による没入の心理測定が行われた。脳波（EEG）、心拍率（HR）、皮膚電気伝導度（SC）と筋電（EMG）などの生理心理学的測定も行われた。全3人の被験者が解離の測定で高得点であり、そのうちの1人（スピリティズム実践家）だけが没入でも高得点だった。結果、2名のスピリティズム実践家において、全体的な抹消自律神経系（PAN）の亢進が、中枢交感神経の非亢進と直接結びついていた。しかし、PANの亢進は対照被験者において、中枢交感神経の亢進と結びついていた。この結果は、2名のスピリティズム実践家で部分的に、中心神経系と抹消自律神経系の生理心理学的な不整合が起こっていることを示した。

P2 - ブラジルにおける特異心理学：未来への挑戦

要旨

筆者は、特異心理学（特異体験と主張されるものの研究を目的とする心理学の1分野）の歴史と筆者の経歴を、永続的に学術界に食い込むための共同戦略を議論する目的で論じる。最近、ヨーロッパでは特異体験の学術センターの数が増加しており、これを敬意を込めて「モリス効果」と呼ぶ。モリスは北米出身の心理学者で、エジンバラ大学（スコットランド）の特異体験研究に特化した研究センター、ケストラー講座の主任教授を約20年間務めた人物である。彼の下で学んだ学生は他の大学に新しい研究センターを設立して特異体験の研究を行っている。最近、サンパウロ大学に特異心理学の課程が開設されたように、モリス効果はラテンアメリカでも再現可能である。それを狙って、筆者は「特異心理学教育討論ネット」の立ち上げというアイデアを述べる。これはインターネットフォーラムであり、学術界における特異体験研究の存在を増すための共通戦略の構築するよう、ラテンアメリカの研究者の労力を結集するのが目的である。

キーワード：特異心理学、特異体験、大学、科学教育

円卓会議 M1 - M2

M1

M1a - カオス理論と覚醒・夢見における創造性

要旨：創造的思考というものには、それが覚醒状態、あるいは夢見状態のいずれの場合であっても、カオスや「カオスの縁」、自己組織化、各種カオス現象といった動的過程が含まれているだろう。こういった動的過程は誤解されがちで、無意味だとか病的とされたりするが、どちらかといえば、それは健康的なだけでなく、実際的で有用だと思われる。



M1b -心の包括性の理解のための特異体験の重要性

要旨：心を理解する上での特異体験の重要性が、専門家や心理学史・精神医学史の研究者によって認識され始めている。意識についての昨今の議論から、意識の理解のためには特異体験（特に一部の超常的体験）研究が重要と考える専門家がますます増えている。この論議の的になる問題は、好意的にしる、あるいは好意的でないにしる、異なる意見が出されている。ともかく、否定できないのは、超常的体験の背後に本当に超常的な過程があるなら、意識と心の概念を完全に見直さなければならないということである

M1c - ある超心理学者のサイ体験

要旨：この発表は、私自身が直接・間接に体験した超常現象やサイ現象の報告から成る。私にとって印象的だった経験を、できるだけ簡潔で客観的に述べる。私は、予知、テレパシー、透視と念力を体験したことがある。私が目撃できた他の人の体験も、違った方法で私に影響を与えた。私は科学的方法の観点からその経験に価値が無いことを意識しているが、にも関わらず、その経験は類似の出来事を体験した人に役立てることができる。

M2 - サイ研究と神経科学

M2a - サイ研究と神経科学

要旨：サイ体験は真に特異な出来事によっても起こるし、そうでない場合にも起こりうる。したがって、存在論的問題と認識論的問題の交わるところが、サイ研究の主な関心事である。私たちは、サイの「手口」について、まだあまり知らない。すなわち、日常生活で起こったと言われるサイ的出来事で、主観的な解釈を越えるものが何なのかを。この意味で神経科学は、情報を収集・処理・反応するときの脳の働きを非常に客観的に調べるので、サイ研究でも重要な役割を果たすことができる。ESP経験の誘発や再現という点でガンツフェルト実験が成功していることから、一連の実験で好成績を示す人と、そうでない人の比較ができるはずである。ガンツフェルト実験は、神経生理学的な測定や解析のための好条件がそろっていると思われる。サイ研究と神経科学の交わりは、サイ研究に貢献するだけでなく、心身相関の議論にも貢献できる。

M2b - 超心理学と神経科学

要旨：サイは生物学的な基盤をもっているか？

神経生理学的研究、特にfMRIを使った研究は、脳は我々の古い部分、グレッグ・ジェイコブスによって先祖の心（AM）と呼ばれたものに優先権を与えると指摘している。それは、マズローが、後にCsikszentmihalyiが述べた至高体験のような超個体的体験（トランスパーソナル体験）と連合している。AMは、我々の爬虫類脳と哺乳類脳に対応する。大脳新皮質は考える心に対応する。部分的、あるいは全体としてAMに連合している神経生理学的過程を理解することは、サイに関係するだろうか？

たぶん、その答えに近づくだけで数十年かかるだろう。しかし、補い合う2つの異なる方法が、答え探しに役立つかもしれない。最初の方法は、サイは科学における概念上の問題にすぎないと見なし、神経生理学的な研究を拡大することである。これは科学哲学者のラリー・ローダンの方法を基にしている。ローダンは、科学は問題解決の活動である、概念的問題は経験的問題よりも重要だと考えた。この方法で最も重要なのは、あまり実験可能ではないが使用可能で、サイによって起こった事柄を説明するのに非常に効果的な概念、信念、提言の核心を得ることである。特に、神経科学研究に精通した超心理学者は、それに対して責任があるだろう。2番目は、ルパート・シェルドレイクが提唱したような、拡張された生物学を考慮するという方法である。シェルドレイクは、拡張された生物学的感覚（人間のサイだけでなく、動物のサイも含む）の中に、7番目の感覚があると考えている。

M2c - 集合意識、神経科学、サイ研究

要旨：この論文では、「集合意識」を支持する神経学的・社会的証拠を議論する。ここで言う集合意識とは、ある単一の、あるいは一まとまりの経験を他人と共有するという感覚である。運動前野と後部頭頂皮質のミラー神経は、他人の行動と同様に意図にも反応する。感情移入に関係する前部島領域と前部帯状回にも、ミラー神経がある。多くの著者は、言語を含む社会性の獲得において、こういったミラーシステムの果たしそうな役割を検討してきた。批判がなかったわけではないが、ムナンは、ミラー神経に支援された交流が、自意識と間主観性の根本の形成を助けたと主張した。社会的ミラー理論を使ったアイデアを組み合わせれば、家族や仲間、他のグループ（こういうところでは、意識の統一感を体験した気が生じる）における個々人の情動的、さらには認知神経的活動におけるダイナミックなパターンの形成を想像するのはむずかしくない。このような例は、「結合問題」（ここでは参加者各人が「もつれ」度を示す）の一種を示している。



M2d - サイと南大西洋磁気異常帯のブラジル：ありそうな意味

要旨：特異現象は心霊研究への興味をかきたてる。その検証のために、生理的な対応物の科学的測定が待たれている。現象の発生は、Gowanが「operations of increasing order」と言ったように、とりあえず多くの人に受け入れられている。どういうわけか、我々が「サイ」と呼んでいる特異現象があることを、我々は「知っている」。しかし、物質科学がそれを自在に取り扱うには、「基本」が欠けている。今日、神経科学が特異現象の裏付けになってきている。サイに関しては、神経系は、特異なソフトウェアを埋め込まれた装置であり、何とかして奇妙なプログラムを実行しているかのようである。我々は、「どうやって？」という答えは持っていない。しかし、体や脳の中の「どこで？」そのプログラムが実行されているかについては手がかりをつかんでいる。我々は、サイを導く生理学と心理学を、ほぼ認識しています。体・脳というハードウェア、エネルギー・思考というソフトウェアの過程、それらほとんどがサイに関わる。絵のように美しいモザイク科学を描くには、宇宙的パズルの部品がまったくと言っていいほど足りない。パラダイム転換の大きな波が「知識」において、特に歴史的には方法論的モデルによって「一方的に」「科学」において起こる。新しい領域が時空や、身体構造、民族学的文化を拡張すると予想できる。脳と心に広がっているサイの場、あるいは意識と脳は、環境と、自然文化状況と関係がある。新たに発見された特異現象は、銀河系の中心と地球、そして日常生活の核心部に存在している。それは統合的天体物理学、地磁気、神経生理学、超能力の各方面で、感情と思考をかき立てる。南半球、南部ブラジルの中央には、今後問題になるであろう南大西洋磁気異常帯（SAMA）が存在する。それはより広範な宇宙的視野や、地表だけでなく、たぶん脳にも届く宇宙線や粒子と関係があるからだ。それは、生物多様性の拡大と宇宙線、あるいは、もしかするとサイという形をとった拡張された肉体的意識の傾向と関係があるはずだ。

非公式発表 Y1 - Y2

Y1 - 知識における無意識過程とその重要性

概要

無意識と意識のレベルはバランスしていなければならず、一方が他方を沈黙させることはないとされている。両者とも重要であり、前者は人類誕生時に人類の生存を助けるのに重要であり、後者は合理的な生活と重要な言語に有利に作用した。脳の中には予備神経群が存在し、各大脳半球が反対側の動きを自由に操る。右半球はすべてを命令するが、逆の左半球もまた同様である。エッセン州立大学のハンス・ヴェラーはPET（陽電子断層法）で右手を失った若いピアニストを調べた。損傷した左半球は、右手の動きをコントロールするために、右半球に「助けを求め」。脳は予備神経群に訴えかけることで自己保存する能力がある。我々は脳のほんの一部だけを使っているわけでない。我々が不活発だと思っていたこういった神経の優れた部分は、万が一の場合に備えて、損傷した機能を補助する。大脳皮質の自己補完能力は90年代（脳の10年）の最も重要な発見である。科学者が脳機能研究に邁進した最近10年間で、右半球は神秘的で宇宙的な英知を持っているように思われる。右半球は、すべてのものの源が生まれる場所として知的敬意を獲得している。しかし、右あるいは左の各半球の作動の支配は、我々の不完全な知性を説明する。人の心は2つの顔を示す。ハインツ・R・パーゼルは、著書「Os sonhos da razão」で、系列タイプ（ヒエラルキーシステム）と並列タイプ（ネットワークシステム）を区別して、この考えを強調している。ヒエラルキーシステムは、各レベルで「上位部」と「下位部」がある。上位部を除去すると、下位部はシステムの残りの部分から切り離される。ネットワークシステムは、ネットワークの各部分との関連を増加させて、接続を多様化する。冗長性が大きく、非中央集権的システムであり、もし一部が壊れてもネットワーク全体は働き続ける。人の脳のネットワークは、無意識的なサイシステムと意識的なヒエラルキーシステムで構成されていると考えられる。そのため、無意識活動は非常に創造的、多角的、非集約的で自動運動的である。これに対して、意識活動は秩序立っており、かつ集約的である。

Y2 - 環境心理測定

概要

この研究は、強い感情の高まりが集まった出来事は、その事実と関連する情報と一緒に、それが起こった環境に焼き込まれたことを示す。そういった焼き込まれた情報は、その場所に直接接触した人々に影響を与えたり、サイコメトリとして知られる超常現象を特徴付けることができる。一例として、ブラジル、ペルナンブーコ州のカマラジベに住む、夫、妻、12歳の双子の子供、メイド1人の家族の事例を示す。新しく借りた家に引っ越した後、家族全体が情緒不安、病気、意見の相違、財政赤字といった数種の問題を経験し続けている。夫、J.I.L.Fが助けを求めて本論文の著者を探したとき、著者は他の家に引っ越すのが一番だと勧めた。一家は引越し、このエピソードは成功裏に終わった。



Y3 - 超心理学と法律

概要

いくつかのサイ現象は法的な問題を引き起こしており、法学生の興味を惹いたり、弁護士や裁判官、検察官の間で議論になっている。この論文は、著作権、犯罪訴訟の証拠としての霊媒のメッセージ、超常的ヒーリング、警察捜査における超常能力の利用、法律における療法師について述べる。結論として、おそらく将来、立法機関は新しいタイプの個人間の関係を確立する法的効力を作るために、特殊な事例において、サイ能力の存在を認めざるを得ない。

Y4 - ヒトのESP能力の検出における統計的過程と実験結果の解釈

要旨

本論文は、ESPの統計処理基準として広く受け入れられているベルヌイ接続の適用限界について述べる。この方法はESP現象の特異な性質を考慮していない。ESP能力は変化しやすく、また自分自身ではほとんど制御できない上、できたとしてもほんの短時間である。実験結果の統計的処理の新しい方法は、実験シリーズ中の正答の系列の分析と、ESPの特徴をもっているかどうかの統計的基準の使用に基づいている。提唱する方法の第1種の誤りの概算を示す。